

朝日新聞パッシング（その1）

—どっちもどっちか—

2014年9月16日

朝日新聞社は福島原発事故をめぐる吉田証言や従軍慰安婦問題の誤報を認め謝罪しました。

9月13日の朝日には、「論じることの原点を心に刻んで」と題した社説がでています。

その「論じることの原点」をどう捉えているか、そしてそれを踏まえた反省と謝罪をどう記しているか、とくにご覧になってください。

それはさておきます。ここでは、朝日新聞パッシングで今マスコミは沸騰していますが、どっちもどっち、という思いがしています。

例えば読売新聞は、新聞配達の厚紙のチラシに、「慰安婦報道検証 読売新聞はどう伝えか」を大量に配布しました。わが家にも入っていました。

そのチラシのなかで、このときとばかり「読者の声」を数多く掲載しています。その一例です。

「読売の記事を痛快に読んだ。国の政策を誤らせた朝日の責任は重大だ」（60代、男性）

「読売の力で、ようやく朝日新聞が誤りを認めた。本当に感謝している。子供たちの未来のために、これからも正しい報道をお願いしたい」（60代、女性）

そして、その下に、「読売新聞ご購入のお申し込みは」

と電話番号を大きな文字で記しています。

新聞社も企業ですので、販売促進は重要な経営戦略です。しかし、ここぞとばかり朝日から読売への露骨な勧誘攻勢には、もっと節操があってもいいのでは、という思いがします。

むろん、朝日に肩入れするつもりはありませんが、そこに何か違和感を覚えます。

朝日新聞パッシング（その2）

－同じ構図－

9月20日

9月13日の朝日社説「論じることの原点を心に刻んで」の「論じることの原点」とは、せんじつめれば「反証と異論に謙虚」ということでしょう。

そのことは、「自分たちの主張の都合の良いように事実を集めたのではないか」という点であり、まさに一番重く受けとめなければならない点だと思います。

朝日にかぎらず、多くの失敗に共通する原因、根っ子に謙虚さの欠如（傲慢さ）が指摘できます。

逆に言えば、謙虚な姿勢は、過度な競争から自ら避けることができるといえます。

ところで、ここでも朝日に肩入れするつもりはありませんが、山口二郎「朝日新聞批判に見る多元的民主政治の危機」（『東洋経済』9月27日号）の一読をお薦めします。

そこでは「それにしても今、かさにかかって朝日を攻撃している読売、産経の両紙の姿は、はっきり言って異常である」と記していますが、それは端的には「赤狩り」（1950年代米国のマッカーシズム）と同じ構図ということです。

また、マッカーシズムの虚偽を見抜いたジャーナリストのエドワード・マーローに触れていますが、その戦いを描いた映画「グッドナイト&グッドラック」を見たくくなります。

「権力者とそれを翼賛するメディアのウソは放置され、批判的なメディアや学者の議論が抑圧されるという状態が深刻化すれば」、それはまさに多元的民主政治の危機であり、一元的な社会への危険な方向となります。

まさに、ジャーナリスや学者の世界に日本のマーローがいるかどうか、ということです（※注1）。

それにしても、今回の朝日報道をめぐる各紙の扱いは、新聞各紙が政治的・思想的に中立のものでないことを、あらためて世間に知らしめています。

それだけにメディアの責任は大きく、今回の朝日に限ったものではありません。

私がときどき沖縄タイムスや琉球新報を見ているのも、その一環としてあります。

※注(1)あとで読んだのですが、あのアメリカの9・11事件のとき、ベルリン滞在中のアメリカ人作家スーザン・ソントグの意見が、ここでのマーローに通じます(朝日9/25論壇時評「『愛国』の『作法』について」高橋源一郎稿)。

朝日をたたくのはいいのですが(またたかかれてもしかたないですが)、問題はその「たたき方」、とりわけその根っ子にあるものです。つまり愛国の「作法」です。